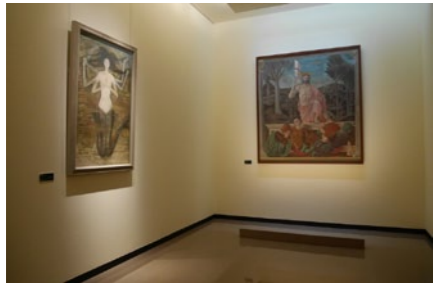


祈りの部屋 故郷の平和を祈って



(左) 石本正「祈りI」
(右) 岡崎忠雄「キリストの復活」
(ピエロ・デッラ・フランチェスカ作 模写)

生前、戦争による人命や文化の破壊行為を強く批判し、故郷がいつまでも平和であることを切に願っていた石本。
イタリアのサンセポルクロの街を第二次世界大戦の空爆から救ったと言われる壁画を5年かけて模写した日本画家・岡崎忠雄の「キリストの復活」と、故郷の将来を思い続けて描いた石本正の三部作「祈り」より「祈りI」を常設展示しています。

膨大な作品群 2,000点超の石本作品

本館・新館にある総床面積約200坪の収蔵庫には、石本が生涯にわたり描き残した本画、デッサンやスケッチの数々を収蔵。また、石本正の作品以外にも、彼が長きにわたる画家人生の中で確かに感動を覚えた他作家の作品も多数収蔵しており、「絵は心である」という精神を、展覧会を通して伝え続けています。
〔石本正:本画(586点) デッサン他(1,647点)、他作家:(422点)〕

かせいえん
華晴苑

こよなく愛した牡丹の花

石本正が毎年スケッチに通い続けた京都の「無二荘牡丹園」から、実際に作品に描かれた株をはじめとする13本が移植され、2016年に誕生した牡丹園。
明治初期から代々花守を続けてきた辻尾仁朗氏のご厚意により寄贈され、第二の故郷としてこの地で花を咲かせました。長いもので樹齢100年を超える大変貴重な原種の牡丹は、開花時にはかくわしい香りを漂わせます。画家に感動を与えた本物の花を、ぜひ間近でご覧ください。(4月中旬~下旬頃開花)



しだれ桜 地域の人々に愛されて



美術館のシンボルツリーである樹齢約35年のしだれ桜。このしだれ桜を植えるアイディアは、石本先生の奥様から提案されたもので、群れて咲く桜並木よりも一本桜

を好んだ孤高の画家の精神に通じるようでもあります。
岩盤の上に位置し、若木が根を張るには厳しい環境ではありましたが、地元の方々の支えもあって、見上げるまでの高さに育ちました。春になると咲き誇る桜の下で「しだれ桜コンサート」が開催され、多くの来館者の心を癒しています。

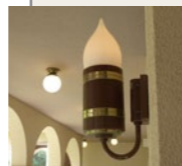
建築 回廊と塔のある美術館



設計：金多潔（京都大学名誉教授、2016年日本建築学会大賞受賞）
監修：石本正

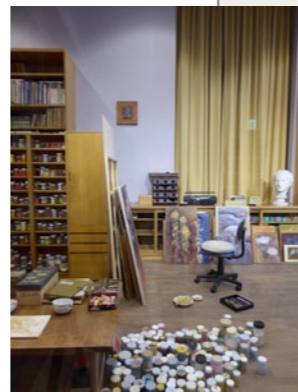
中世ロマネスク時代の古い教会を模した、山陰では類を見ない建物。これは、ロマネスク美術に強い憧れを持っていた石本の想いをよく知る、友人で建築家の金多潔氏に

よって設計されました。アーチ状の柱が並ぶ回廊と中庭、シンボリックな塔は修道院風でありながら、ふるさと石見の石州瓦や福光石なども使用されており、入口には石本自身がデザインした絵筆をかたどった門灯が来館者を出迎えてくれます。



石本正のアトリエ 石本芸術の原点に触れる

ご遺族様のご厚意により完成した、京都・等持院にあるアトリエを模した空間。在りし日の絵に向かう画家の姿を想像していただけるような雰囲気づくりを心がけ、床の色、物の配置など可能な範囲で再現しました。
また、美術関連図書の閲覧ができる休憩スペースを併設しています。実際に絵を描きながら聴いていたクラシック音楽が流れる部屋で、画家と共にゆったりとしたひとときを過ごすような、特別な時間をお楽しみください。



SEKISHO ART MUSEUM

石正美術館
館内であんない



塔の天井画

900人の「描くよろこび」が
実を結んだ“天井画”



ヨーロッパ美術を巡る旅の中で、“地元の教会を地元の人たちが守り続ける姿”に感銘を受けた石本。そんな彼の「地域に根差した文化こそが最も重要だ」との強い思いからこの天井画は生まれました。石本が描いた大麻山神社の藤棚の絵をもとに、市内外の子どもから大人まで約900名の参加者が力を合わせて制作したこの絵は、人々の「描くよろこび」が詰まった当館の象徴的存在です。

◎観覧をご希望の方は受付にてお申し出ください。

やすらぎの庭

四季折々の花に癒されて



2016年の開館15周年にあわせ、画家が愛し描き続けてきた植物を植える活動を、ボランティアの方々とともに行いました。
実際に絵に描かれた「牡丹」や「アジサイ」などが植えられ、四季を通じて花々を楽しむことができる「やすらぎの庭」として生まれ変わりました。庭には、オープンテラスが設けられ、心地よい風を感じながらゆったりとしたひとときを過ごすことができます。